

ASAHIKAWA CREATIVE CITY of DESIGN

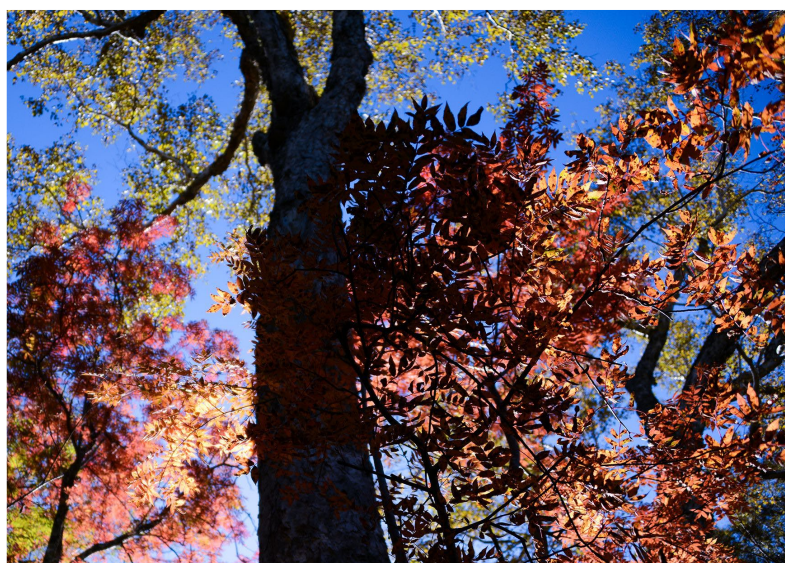
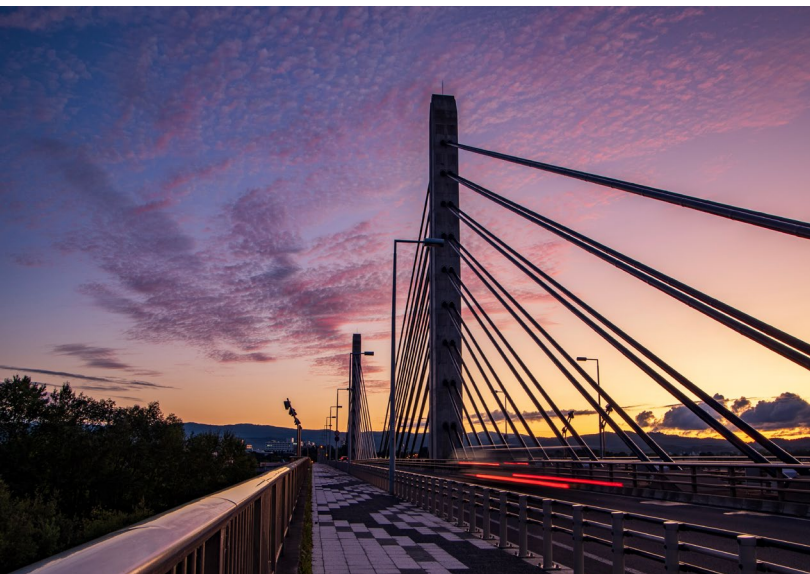


デザインの
森をつくる

自然と産業、暮らしと
学びをつなぎ、旭川の
未来を共に育てる



旭川には、未来につながる風景があります。



自然、ものづくり、学び、人のつながり。そして、世界の創造都市との交流。あさひかわ創造都市推進協議会は、旭川にある多様な価値をデザインの視点で見つめ直し、暮らしや産業、地域の未来につなげる活動を進めています。この冊子では、その取組を、背景にある考え方とともに紹介します。

世界とつながり、 旭川を見つめ直す



旭川市は、大雪山・十勝岳連峰の雄大な山々を背景に、石狩川をはじめ多くの河川がまちを潤す、四季の彩りにあふれたまちです。この豊かな自然環境は、家具・木工・鉄工をはじめとするものづくりの文化、森林資源を活かす知恵、厳しい冬を乗り越える暮らしの工夫、卓越した職人の技など、本市のかけがえのない魅力を育んできました。

こうした背景と風土が国際的に評価され、本市は2019年にユネスコ創造都市ネットワーク(UCCN)のデザイン分野への加盟認定を受けました。これは、私たちが磨き上げてきた産業や文化が世界に通じる価値を有することの証であり、デザインの力で持続可能な社会を築いていく国際社会への決意表明でもあります。

私自身、あさひかわ創造都市推進協議会の渡辺会長に御教示いただきながら、ブラジルで開催されたUCCNの年次総会に参加し、世界の創造都市が地域資源や文化を大切にしながら、まちの未来を切り拓こうとする姿に大きな刺激を受けました。また、ミラノ市長ジュゼッペ・サラ氏との面会や、イタリアの建築家でデザイン界の巨匠であるミケレ・デ・ルッキ氏との出会いは、本市にとっても私自身にとっても、大きな意味を持つものとなりました。「旭川デザインアンバサダー」であるデ・ルッキ氏は、旭川の自然やものづくり、旭山動物園をはじめとする地域の魅力に深い関心を寄せてくださり、デザインを通じて、人と自然、地域と世界をつなぐ多くの示唆を与えてくださいました。こうした関係性は、旭川が国際的なデザイン都市として歩みを進めていく上で、かけがえのない財産であります。

2024年には、世界21か国23のデザイン都市から48名の関係者を迎え、「UCCNデザイン都市旭川会議」を開催しました。旭川の自然、ものづくり、暮らし、デザインに対する考え方を世界に発信するとともに、海外都市との交流を通じて、旭川の可能性を改めて実感する機会となりました。世界とつながることは、外に向けて旭川を発信するだけでなく、私たち自身が旭川の価値を見つめ直し、次の世代へ何をつないでいくのかを考える機会でもあります。

さらに、本市では、行政におけるデザインの活用を進めるため、日本の地方自治体として初めて「デザインシステム」を導入しました。これは単に見た目を整えるものではなく、市民の皆様に必要な情報をより分かりやすく、伝わりやすく届けるための仕組みです。デザインを行政運営やまちづくりにも活かすことは、創造都市・旭川にとって重要な挑戦であり、市民の皆様に寄り添う市政を進める上でも大切な視点であると考えています。

本市では、あさひかわ創造都市推進協議会を中心に、市民、企業、教育機関、行政が連携し、あさひかわデザインウィークやまちなかキャンパス、地域産業の振興、海外創造都市との交流などに取り組んでいます。これらの取組に共通しているのは、旭川にある価値を見つめ直し、それを次の世代へつなぎ、新たな可能性へと育てていくという思いです。本誌を通じて、旭川の創造都市としての挑戦を多くの方に知っていただき、活動への御理解と共感の輪がさらに広がりますことを心より願っております。これからも、市民の皆様とまちへの愛着と誇りを分かち合い、「あなたと共に」という思いを大切にしながら、産学官金の緊密な連携のもと、次世代に誇れる「世界の環境に貢献するサステナブルデザイン都市・旭川」の実現へ向けて邁進してまいります。

あさひかわ創造都市推進協議会 顧問
旭川市長 今津寛介

もくじ

1	あさひかわの特長	
	道北の自然とその恩恵	6
	自然の恵みを産業に活かす	7
	都市の力を創造の力へ	8
	あさひかわのデザイン史	9
	あさひかわのデザインイベント	10
2	デザインの恩恵と課題	
	デザインがもたらした恩恵	12
	デザインが果たすべき責任	13
	デザイン思考とデザイン経営	14
	あさひかわの課題とデザイン	15
	旭川市のデザインシステム	16
3	ユネスコデザイン創造都市旭川	
	ユネスコデザイン創造都市旭川	18
	国内ユネスコ創造都市との交流	19
	デザイン都市旭川のプロジェクト	20
	デザイン都市の担い手を育てる	21
	サブネットワーク国際会議 in 旭川	22
	ユネスコ創造都市国際交流	24
	国際交流プロジェクト	25
	デザイン都市旭川宣言	26
4	あさひかわ創造都市推進協議会	
	協議会の理念と活動の経緯	28
	協議会四部会活動	29
	あとがき	30
	入会と活動のご案内	31

ASAHIKAWA

Features of Asahikawa

あさひかわの特長

デザイン創造都市旭川の源泉には、豊かな自然と都市機能の調和があります。森や川、四季の明瞭な気候、広がる農地やものづくりの風景などに息づく旭川らしさ。その価値を見つめ直し、デザインと創造力で未来に生かすための活動に取り組んでいます。

1

Nature of Asahikawa

道北の自然とその恩恵

旭川の豊かさは、自然の上に成り立っています。山々に囲まれ、石狩川をはじめ多くの川が流れるこの地域では、森が木を育て、川が大地を潤し、寒暖差が農産物の味を深めてきました。四季の風景は、暮らし、産業、文化を支える大切な基盤です。この自然の恵みは、地域産業にも深く結び付いています。森林資源は建築や家具づくりを支え、肥沃な大地は米や野菜を育て、食品加工や観光にも広がっています。さらに旭川は、大規模な自然災害が比較的少なく、安心して暮らし、事業を続けやすい環境も備えています。

自然は木材や食料を生み出し、気候を整え、水や空気を浄化し土壌や生物多様性を保ちます。また、美しい景観や四季の変化は、学びや文化、デザインの発想を生み出す源にもなります。

経済は自然環境の中で成り立っており、人間社会は無料で多くの自然の恩恵を受けています。こうした生態系が人間にもたらす便益は「生態系サービス」と呼ばれます。



森林、河川、土壌、生物多様性などの自然の働きを、社会や経済の基盤として捉える「生態経済学」では、様々な自然の価値を科学的に評価してきました。その背景には、経済活動もまた地球環境の制約のなかで営まれるものであり、自然なしに成り立つことはできないという考え方があります。また、市場で価格のつかない自然の働きの重要性を、社会に見える形で示そうとする試みでもあります。

生態系サービスの価値は、世界全体で見ると非常に大きく、研究によっては世界のGDPに匹敵、あるいはそれを上回る規模になるとも推計されています。

森林や河川が広がる上川地域でも、こうした自然の価値は暮らしや産業の土台となっています。従来の経済指標だけでは見えにくいこの豊かさを、政策、産業、暮らし、教育に生かしていく視点が求められます。



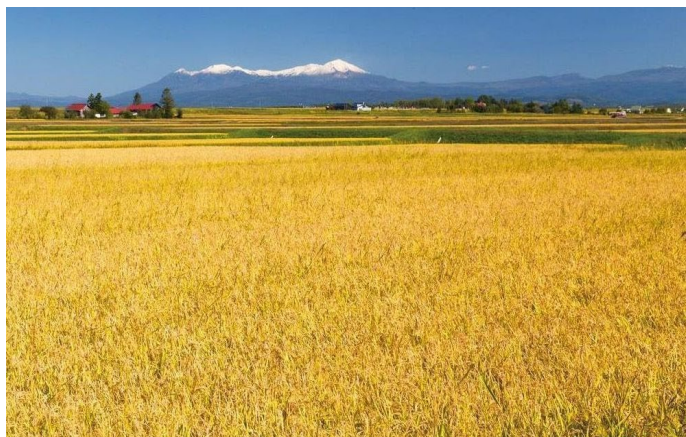
〈生態系サービスの4つの働き〉

- | | |
|---|---|
| 1.供給サービス
(人間が直接使えるもの) <ul style="list-style-type: none">・ 木材・ 食料 (農作物・魚など)・ 水・ 医薬品の原料となる生物 | 3.文化的サービス
(心と文化を支える価値) <ul style="list-style-type: none">・ 景観・リラックス・ 教育・学習・ レクリエーション・ 文化・デザインの着想 |
| 2.調整サービス
(自然が環境を整える機能) <ul style="list-style-type: none">・ 温暖化の抑制・ 洪水・土砂災害の防止・ 水質浄化・ 受粉 (ミツバチなど) | 4.基盤サービス
(他のサービスを支える働き) <ul style="list-style-type: none">・ 土壌形成・ 養分循環・ 光合成・ 生物多様性の維持 |

自然の恵みを産業に活かす

旭川市とその周辺地域は、肥沃な大地と寒暖差の大きい気候に恵まれ、質の高い農産物を生み出してきました。上川盆地で育つ米は、昼夜の気温差によって旨味が凝縮され、食味・品質ともに高く評価されています。野菜類も糖度が高く、風味豊かで、地域の食を支える大切な資源となっています。

近年は、農産物をそのまま出荷するだけでなく、食品加工、流通、飲食、観光との連携により地元産品を活かした商品開発やブランド化も進んでいます。食材の背景にある風土や生産者の思いを伝えることは、地域の魅力を高める重要な視点です。「フードフォレスト構想」は、こうした農業資源を基盤に、食とデザイン、観光、教育を結び付け、新たな地域価値を生み出す取組です。



また、旭川地域は、豊富な森林資源を背景に、林業、製材業、家具産業が一体となって発展してきました。北海道産の多様な樹種を活用できる素材力、木材を高品質な材料へと加工する乾燥・加工技術、使い手の暮らしに寄り添うデザインの力が、旭川家具の価値を高めてきました。地域内には約100社の家具関連企業が集積し、多品種少量生産や短納期対応にも応えられる柔軟な生産体制が築かれています。

地域材を活用した環境配慮型のものづくりと、品質やデザインによるブランド力を両立してきたことにより、旭川家具は国内外で評価される産業へと成長してきました。森から切り出された木が、製材、乾燥、加工、設計、製作を経て、暮らしの中で長く使われる家具になる。そこには、自然の恵みを地域の技術と感性で価値へと高める循環があります。



旭川には、こうした産業を支える人材育成と技術開発の基盤もあります。北森カレッジは実習を中心に林業人材を育成し、林産試験場は木材の乾燥や加工に関する研究を通じて道産材の可能性を広げています。北方建築総合研究所は、寒冷地に適した建築、住まい、まちづくりの調査研究を進め、旭川市工芸センターは、製品試験や技術支援により地元家具産業を支えています。また、旭川高等技術専門学院は、ものづくりの現場を担う実践的な人材育成を担っています。自然資源は、そのままでは地域の力になりません。それを学び、加工し、伝え、暮らしや産業の中で価値へと変えていく仕組みがあってこそ、地域の強みになります。食と木を中心に、資源、人材、技術、デザインが循環する産業のあり方は、旭川がこれからも大切にすべき地域づくりの土台です。



Design in Asahikawa

都市の力を創造の力へ

旭川は、豊かな自然に囲まれたまちでありながら、道北の暮らしと産業を支える都市機能を備えています。

旭川空港は、市内中心部から車で約30分の距離にあり、降雪地帯でありながら就航率は99%を超えています。JR旭川駅は道北の鉄道交通の拠点として、札幌方面や道内各地を結び、人の移動と物流を支えています。自然に近く、都市としての利便性もあることは、旭川の大きな特長です。

医療面でも、旭川は道北の拠点都市として重要な役割を担っています。複数の総合病院や専門医療機関が集まり、救急医療から高度医療まで幅広く対応できる体制があります。また、旭川医科大学を中心に医療人材の育成も進められており、地域全体の安心を支える基盤となっています。

旭川のもう一つの強みは、デザインや表現力を育てる教育の蓄積です。旧東海大学旭川キャンパスでは、芸術工学教育を通じて、地域にデザインの考え方と人材を残してきました。現在も、その卒業生や関係者は国内外で活躍し、旭川のデザイン文化を支える存在となっています。北海道教育大学旭川校は美術・デザイン教育を通じて地域文化を育み、旭川工業高等専門学校は工学やものづくりの実践教育を通じて、技術と創造性を兼ね備えた人材を育成しています。旭川高等技術専門学院は造形や印刷などの実践的スキルを担っています。さらに、2026年4月に開設された旭川市立大学地域創造学部は、地域課題をデザイン思考で考える新たな学びの場となります。



文化もまた、旭川の創造性を支える重要な土台になっています。市内の橋や公園などの公共空間には、約100基の野外彫刻が点在し、「彫刻のまち」として日常の中に芸術が息づいています。

市民オーケストラは半世紀以上にわたり活動을続け、中学・高校の吹奏楽や合唱も高い評価を受けてきました。文学、音楽、彫刻など、多様な表現が地域の風土と結び付きながら育まれています。そして、旭川の文化の根底には、自然と共に生きる感性があります。

先住民族であるアイヌの文化に見られる、自然界のあらゆる存在に意味を見出す世界観は、旭川の文化やものづくりを考える上で大切な視点です。自然、都市機能、教育、文化が重なり合っていること。そこに、旭川がデザイン創造都市として歩むための土台があります。

あさひかわのデザイン史

旭川のデザインは、家具や木工、都市空間、教育、文化の中で、長い時間をかけて育まれてきました。1954年には旭川木工デザイン研究会が設立され、木工産業を基盤にデザインへの関心が高まりました。1976年には、ファッションの分野で時代を牽引した石津謙介氏らを招いて旭川デザインシンポジウムを開催。これを機に、デザインの議論は産業から地域へと広がっていききました。都市デザインでも、旭川は先進的な取組を進めてきました。1972年に完成した平和通買物公園は、日本初の恒久的な歩行者専用道路です。旭川駅から約1kmにわたり、安心して買い物や憩いを楽しめる空間として整備されました。市民、商店街、行政が連携し、車中心から人中心へと転換した、旭川を代表する公共デザインです。

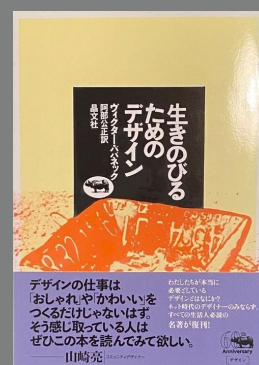
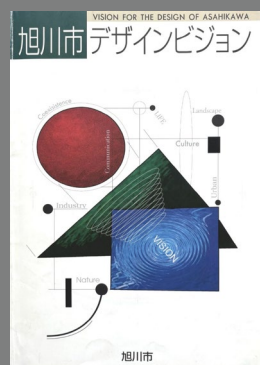
- 1954 デザイン研究グループ活動開始
- 1955 旭川市木工芸指導所開設
- 1972 東海大学工芸短期大学開学
- 1976 旭川デザインシンポジウム開催
- 1985 旭川家具デザイン開発研究会発足
- 1987 旭川国際デザインフォーラム開催
- 1988 国際デザインフォーラム旭川'88開催
- 1990 国際家具デザインフェア旭川開催
- 1999 旭川デザイン協議会発足
- 2003 東海大学芸術工学部開設
- 2012 旭川デザインシンポジウム開催
- 2015 ASAHIKAWA DESIGN WEEK2015開催
- 2019 あさひかわ創造都市推進協議会設立
- 2019 旭川市がユネスコデザイン創造都市に加盟
- 2020 Making Next to Forest シンポジウム開催
- 2024 UCCNデザイン分野サブネットワーク会議開催
- 2026 旭川市立大学地域創造学部開設



人を大切にする考え方は、北彩都あさひかわにも引き継がれています。旭川駅の南側に広がる約86ヘクタールに及ぶ広大な再開発として、およそ四半世紀をかけて整備されてきました。内藤廣氏の設計による旭川駅を中心に、歩行者の動き、河川、水辺、緑地、都市機能がつながる空間がつくられています。これは、単なる駅周辺整備ではなく、自然と都市をもう一度結び直す長期的な都市デザインの取組です。

1997年に策定された「旭川市デザインビジョン」では、デザインを「新しいものをつくること」だけではなく、地域の素材や特性を生かし、不足するものを補い、余分なものを取り除きながら、地域を磨き上げる営みとして捉えています。また、地域デザインの重要なテーマとして、自然と人との良い関係、自然環境との共生が掲げられました。これは、現在のデザイン創造都市の考え方にもつながる重要な視点です。

さらに、旭川はデザイン思想の面でも大切な人物を生んでいます。旭川出身の阿部公正氏は、1971年のヴィクター・パパネックの著書を翻訳し、1974年に『生きるためのデザイン』として紹介しました。この本は、デザインが社会や環境に与える影響を問い直した重要な一冊として、今日まで読み継がれています。半世紀以上も前から、デザインを見た目や商品価値だけでなく、社会や環境との関係から考える視点が、旭川につながっていたことは、私たちが受け継ぐべき大切な財産です。



Asahikawa Design Events

あさひかわのデザインイベント(IFDAとADW)

旭川のデザインを世界に開いてきた代表的な取組が、1990年に始まった「IFDA(国際家具デザインフェア旭川)」です。旭川市開基100年を記念して始まったこのイベントは、木材集散地としての歴史と、家具産業の蓄積を背景に、3年に1度開催されてきました。

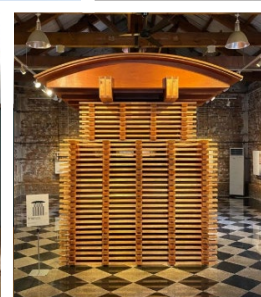
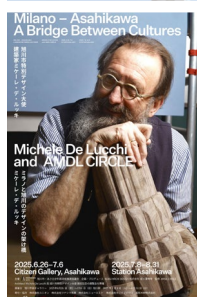
中心となる「国際家具デザインコンペティション」には、これまで12回の開催で、世界79か国以上から延べ10,084点の応募がありました。家具デザインを通じて、世界のデザイナーと旭川の産地がつながり、新しい感性や技術を取り入れる機会となってきました。IFDAの継続は、旭川家具を「つくる産地」から「デザインで価値を生み出す産地」へと進化させる大きな力になりました。

2015年には、それまで60回続いた「旭川家具産地展」を改め、「ASAHIKAWA DESIGN WEEK」が始まりました。家具産業を中心とした展示会から、まち全体を舞台に、産業、暮らし、食、教育、文化をつなぐデザインイベントへと発展させることが目標になりました。

2019年に旭川市がユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野に加盟したことは、ADWにとっても大きな転機となりました。家具産業に加え、企業、教育機関、行政、金融機関、近隣自治体など、多様な主体が関わる広域的な取組へと広がっています。また、旭川特別デザイン大使であるミケーレ・デ・ルッキ氏との関わりも、旭川の活動に国際的な視点を加えています。

現在のADWでは、食と地域資源を伝える「あさいち」、高校生が主体となる「まちなかキャンパス」、対話を深める「THE TALK」、クリエイターが交流する「goen」など、市民参加型の企画が定着しています。近年は、来場者が見るだけでなく、体験し、語り合い、学び合う場づくりを重視しています。これらは単なる催しではなく、世代や分野を超えて人が出会い旭川の価値を見つめ直す大切な場となっています。

IFDAとADWは、旭川のデザインを外へ発信するだけでなく、地域の中にデザインの考え方を広げる役割を担ってきました。イベントを通じて、人、産業、学び、まちがつながること。その積み重ねが、デザイン創造都市旭川の活動を支える基盤となり、次の協力や挑戦を生み出しています。



DESIGN

The Impact of Design, Now and Into the Future

デザインの恩恵と課題

デザインは、暮らしや社会を豊かにしてきました。これからは、ものを美しく使いやすくするだけでなく、環境や社会の課題を見つけ、人や仕組みをつなぎ、解決へ導く力として生かすことが求められています。

2

The Role of Design

デザインがもたらした恩恵

デザインは、20世紀の暮らしを大きく変えてきました。1919年にドイツで設立されたバウハウスは、建築、工芸、製品、視覚表現を横断し、近代デザインの考え方を広げました。工業化と大量生産が進む中で、デザインは、美しく、使いやすく、手に届きやすい製品を社会に広げる役割を担いました。それは、限られた人だけのものだった快適さや美しさを、多くの人の日常へ届ける大きな力でした。

戦後の日本でも、デザインは経済復興と産業成長を支える力となりました。1955年頃から約20年間続いた高度経済成長期には、家電や自動車などの製品が暮らしを大きく変えました。カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機、自動車などは、便利さだけでなく、新しい生活への憧れを形にしました。機能性と美しさを両立した製品は、国際市場でも評価され、「メイド・イン・ジャパン」への信頼を高めました。そこには、技術だけでなく、使う人の生活を考える工業デザインの力がありました。その後、社会は「量の豊かさ」から「質の豊かさ」へと移っていきます。

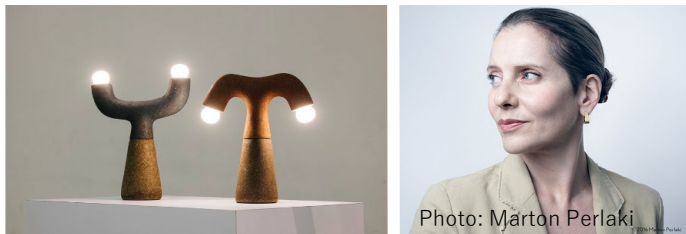
企業はブランド戦略やパッケージ、広告、店舗、サービスの設計にデザインを活用し、製品や企業の価値を分かりやすく伝えるようになりました。デザインは、ものを売るための表現にとどまらず、企業と生活者をつなぎ、暮らし方そのものを形づくる存在になっていきました。清潔で便利な生活、分かりやすい表示、快適な住まい、使いやすい道具など、私たちが当たり前と思っている日常の多くに、デザインの恩恵があります。

1990年代以降、情報技術の発展により、社会の中心は「もの」から「情報」や「体験」へと大きく移りました。スマートフォンやウェブサービス、アプリなどが日常に広がる中で、複雑な情報を分かりやすく整理し、直感的に使える体験をつくるデザインの重要性は一層高まっています。デジタル端末の画面の見やすさ、操作のしやすさ、迷わず目的にたどり着ける仕組みは、現代社会に欠くことのできない基盤になっています。

現在、世界をリードする多くのIT企業は、技術力だけでなく、ユーザー体験やブランド、サービス全体を設計するデザイン力を競争力の中心に置いています。

優れたデザインは、情報を分かりやすくし、製品やサービスへの信頼を高め、人の行動を支えます。デザインは、暮らしを便利にするだけでなく、人と技術、人と企業、人と社会をつなぎ、経済や社会の仕組みを動かす重要な力になっているのです。





デザインが果たすべき責任は、ものやサービスの価値を高めることにとどまりません。課題の背景を掘り起こし、多様な人の声をつなぎ、持続可能で幸せな未来への道筋を描くこと。それが、これからのデザインに求められる役割です。

あさひかわの課題とデザイン

旭川は今、人口減少と少子高齢化、担い手不足、気候変動など、いくつもの複雑な課題が重なり合う時代を迎えています。

特に人口減少は、地域の働き手を減らすだけでなく、交通、医療、教育、公共施設など、暮らしを支える都市機能の維持にも影響します。若い世代が旭川で学び、働き、暮らし続けたいと思える環境をどうつくるかは、まちの将来を左右する大きなテーマです。

また、地球規模の課題も旭川と無関係ではありません。気候変動による降雪や寒暖差の変化は、農業、森林、観光、暮らしに影響を与えています。道南から道央へ広がるナラ枯れ被害は、道北の森林資源にも関わる問題です。さらに、エネルギーや石油由来素材の供給不安は、私たちの生活や産業が外部資源に依存していることを改めて示しています。

こうした課題は、行政だけ、企業だけ、市民だけで解決できるものではありません。人口、産業、自然、教育、暮らしが複雑につながっているからこそ、分野を越えて考え、人や資源を結び直す視点が必要です。そこで重要になるのが、デザインの力です。

デザインは、見た目を整えることだけではありません。課題を見つけ、人の声を聞き、関係者をつなぎ、小さく試しながら、より良い仕組みや行動を生み出す方法です。旭川では、この力を「つなぐ力」「つくる力」「伝える力」と捉えています。

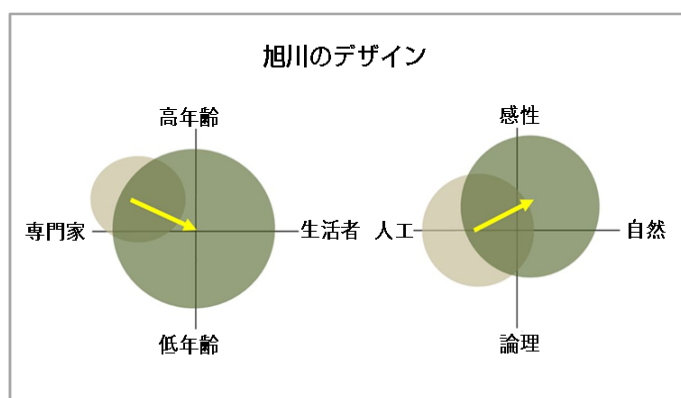
「つなぐ力」は、世代、分野、地域、国内外の人々を結び付ける力です。「つくる力」は、自然や産業、文化を生かし、新しい価値や仕組みを生み出す力です。「伝える力」は、旭川にある価値や課題を分かりやすく共有し、共感と参加を広げる力です。

旭川がユネスコデザイン創造都市になって以来、世界の創造都市との交流が生まれ、若い世代や市民が関わる機会も増えてきました。これからは、専門家や一部の関係者だけでなく、学生、企業、市民、行政が共に考え、行動することが大切です。

デザインは、課題を一気に解決する特効薬ではありません。しかし、多くの人が関わり、地域の資源を見つめ直し、未来への選択肢を増やすことはできます。

旭川の自然、ものづくり、文化、人のつながりを生かしながら、持続可能で幸せな未来を次の世代へ受け継ぐこと。それが、あさひかわ創造都市推進協議会がデザインを通じて目指す姿です。

・つなぐ力 ・つくる力 ・伝える力



Asahikawa Design System

旭川市のデザインシステム

旭川市のデザインシステムは、デザインの「つなぐ力」を具体的な形にしたものです。市が情報を発信するとき、行政サービスを届けるとき、地域の魅力を伝えるときに使う、ビジュアルデザインのルールと仕組みをまとめています。これまで、広報物やサイン、事業ごとのデザインは、それぞれの目的に応じて個別につくられてきました。しかし、発信の見え方がばらばらになると、旭川が大切にしている価値や、デザイン都市としての姿勢が伝わりにくくなります。デザインシステムは、こうした課題を整え、旭川らしさを一貫して伝えるための共通基盤です。システムを構成するマーク、色、文字、レイアウトなどは、旭川市の市章をもとに開発されています。統一感を持たせながらも、行政、イベント、地域活動、企業の発信など、さまざまな場面で使いやすい柔軟性を備えています。

デザインシステムの目的は、見た目をそろえることだけではありません。市民にとって分かりやすい情報を届けること、地域の活動に統一感を生むこと、旭川の世界観を市内外に伝えることが大切な役割です。活用できる人や企業が増えることで、地域の中にデザインの共通言語が生まれ、連携もしやすくなります。旭川魅力を、誰が伝えても旭川らしく届くようにすること。そして、市民や企業が同じまちの価値を共有し、誇りを持って発信できるようにすること。旭川市のデザインシステムは、デザイン創造都市としての姿勢を日常の中に広げていくための仕組みです。



Asahikawa Marks 旭川市デザインシステムマーク

星マーク 使用カラー（4Cの順、背景の濃度がK50%以下の場合）



- A CMYK: K100 RGB: R0 G0 B0
- B CMYK: C10 M42 RGB: R162 G171 B176
- C CMYK: M100 Y100 RGB: R230 B18

星マーク 使用カラー（4Cの順、背景の濃度がK51%以上の場合）



- A CMYK: K0 RGB: R255 G255 B255
- B CMYK: C10 M42 RGB: R162 G171 B176
- C CMYK: M100 Y100 RGB: R230 B18



UCCN

UNESCO Creative Cities Network

ユネスコデザイン創造都市旭川

2019年10月、旭川市はUCCNのデザイン分野に加盟しました。以来、国内外の創造都市とつながり、自然との共生、地域産業、次世代育成などの課題を共有しながら、デザインによる解決の道を探っています。

3

UNESCO Creative Cities Network

ユネスコデザイン創造都市旭川

2019年10月、旭川市はユネスコ創造都市ネットワーク(UCCN)のデザイン分野に加盟認定され、神戸、名古屋に次ぐ日本国内3番目のデザイン都市になりました。

2025年10月時点で、世界のユネスコ創造都市は408都市、そのうちデザイン都市は53都市です。

ユネスコは、教育、科学、文化を通じて国際協力を進める国連の専門機関です。第二次世界大戦の反省から、「平和は人の心の中に築くもの」という理念のもと、国境を越えた相互理解と文化の尊重を大切にしてきました。ユネスコ創造都市ネットワークも、この理念を都市の活動に広げる仕組みの一つです。

創造都市という考え方は、20世紀後半に多くの都市が直面した課題を背景に生まれました。製造業の衰退、中心市街地の空洞化、人口構造の変化、都市間競争の激化により、従来のインフラ整備や企業誘致だけでは、都市の活力を維持することが難しくなりました。そこで注目されたのが、文化や創造性を都市の力として捉え直す考え方です。

英国の都市思想家チャールズ・ランドリーは、文化や創造性を都市再生の資源として位置付け、「創造都市」という概念を示しました。また、米国の経済学者リチャード・フロリダは、知識、技術、芸術、デザインなどに関わる創造的な人材が、都市の競争力や魅力を高めると論じました。創造都市論は、文化を鑑賞や観光の対象にとどめず、産業、教育、市民参加、地域再生を動かす力として捉える考え方です。

UCCNは、こうした流れを受け、2004年に創設されました。文学、映画、音楽、工芸、デザイン、メディア・アート、食文化、建築の8分野があり、加盟都市はそれぞれの創造性を生かしながら、持続可能な都市づくりに取り組んでいます。

旭川が加盟したデザイン分野は、ものの形を美しく整えることに限られません。地域にある資源を見つめ直し、人や自然、産業、暮らしをつなぎ、課題を発見し解決する力としてデザインを生かす分野です。旭川にとってUCCNは、地域の価値を世界へ伝える場であると同時に、世界の知恵を旭川の未来づくりに生かすためのネットワークです。



国内ユネスコ創造都市との交流

ユネスコ創造都市ネットワークは、世界の都市をつなぐ仕組みですが、国内の創造都市同士が学び合うことも重要です。国内には2025年10月時点で12のユネスコ創造都市があり、北海道では札幌市がメディアアーツ分野、旭川市がデザイン分野で加盟しています。各都市は、歴史、産業、文化、自然環境など異なる背景を持ちながら、創造性を地域の活性化や人材育成、国際交流に生かしています。

国内都市との交流の意義は、単なる視察や情報交換にとどまりません。同じ日本の制度や社会環境の中で、それぞれの都市がどのように文化や創造性をまちづくりに取り入れているのかを学ぶことで、旭川の取組を見つめ直す機会になります。分野が異なる都市との交流は、デザインを産業だけでなく、観光、教育、市民活動、地域ブランドへ広げるヒントにもなります。

特に旭川は、同じデザイン分野の名古屋市、神戸市との連携を重ねてきました。2022年のあさひかわデザインウィークでは、「持続可能なユネスコ・デザイン都市」をテーマに、三都市によるセッションを開催しました。これがきっかけとなり、国内デザイン都市が継続的に対話する流れが生まれました。

2023年には東京・丸の内、第1回カンファレンス「往来 | Correspondence」が開催され、シビックプライド、都市の未来、国際ネットワークとの関係性について議論が深まりました。

2024年には名古屋市で第2回が開催され、各都市の実践や市民・産業との関係に焦点を当て、デザインによる地域価値の創出がテーマとなりました。

2025年には神戸市のKIITOで第3回が開催され、「100年後を見据えた地域デザイン」とデザイン都市の役割について議論されました。

旭川における問題提起から、東京での共有、名古屋においての実践深化、神戸での未来志向へ。国内デザイン都市との交流は、旭川の活動を外から見つめ直し、次の実践につなげるための大切な機会です。

世界とつながる前提として、国内の創造都市と学び合い、互いの取組を高め合うことが、デザイン創造都市旭川の基盤を強くしています。

● 国内の加盟都市は以下の12都市。

都市名	分野	加盟年
神戸市（兵庫県）	デザイン	2008
名古屋市（愛知県）	デザイン	2008
金沢市（石川県）	クラフト&フォークアート	2009
札幌市（北海道）	メディアアーツ	2013
鶴岡市（山形県）	食文化	2014
浜松市（静岡県）	音楽	2014
丹波篠山市（兵庫県）	クラフト&フォークアート	2015
山形市（山形県）	映画	2017
旭川市（北海道）	デザイン	2019
臼杵市（大分県）	食文化	2021
岡山市（岡山県）	文学	2023
越前市（福井県）	クラフト&フォークアート	2025



札幌(メディアアーツ)



旭川(デザイン)



名古屋(デザイン)



神戸(デザイン)

Design Projects in Asahikawa

デザイン都市旭川のプロジェクト

旭川がユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野に加盟して以来、あさひかわ創造都市推進協議会は「学ぶこと」を大切にしてきました。デザイン都市として活動するためには、イベントを行うだけでなく、デザインが社会や地域にどのような役割を果たすのかを、市民、企業、教育機関、行政が共に考える必要があるからです。2019年には、作家の山口周氏を招き、複雑化する社会課題に向き合うには、論理や効率だけでなく、美意識や直感、意味を問い直す力が重要であることを学びました。正解が一つではない時代に、デザインが課題を捉え直す力を持つことを示す内容でした。

2021年には、小山薫堂氏による「幸せのデザイン」を開催しました。日常の小さな喜びや人との関係性に目を向け、それを丁寧に形にすることが、地域の価値づくりにつながるという視点が示されました。

ADW2023では、川上典李子氏の進行により「森・都市・文化・産業・教育の新たな座標系」をテーマに議論しました。岩佐十良氏は、南魚沼での実践をもとに、地域の自然や食、宿泊、体験を結び付けて価値を生み出す考え方を紹介しました。森俊子氏は、森林と建築・デザインの関係や、自然と共生する暮らしのあり方を示し、馬奈木俊介氏は、自然資本を含む「新国富」の考え方から地域価値を捉え直す視点を提起しました。これらの議論を通じて、旭川の自然、産業、文化、教育を別々に考えるのではなく、相互につながる地域の資本として見直す視点が共有されました。

ADW2024では、生物学者の福岡伸一氏が「動的平衡」を通じて、生命が壊しながらつくり替える循環の中で成り立つことを示しました。自然界では無駄のない循環が生まれる一方、人間社会は資源を過剰に使い、廃棄物を生み出してきました。この視点は、自然と社会の関係をデザインで結び直す必要性を考えるきっかけとなりました。これらのプロジェクトは、講演やシンポジウムにとどまりません。旭川が何を大切に、どのような未来を目指すのかを考える学びの積み重ねであり、地域の課題、産業、市民の暮らしを次の実践へつなげるための土台です。学んだことを共有し、地域の中で試し、活動に変えていくことで、デザイン都市旭川の取組は少しずつ広がっています。



デザイン創造都市旭川シンポジウム 第2部 パネルディスカッション

— 森・都市・文化・産業・教育の新たな座標系 —

【日時】6月21日(水) 15:30 ~ 17:00

【会場】旭川市公会堂(旭川市常磐公園1971-5)

【パネリスト】 森 俊子 (ハーバード大学大学院教授)
岩佐 十良 (株式会社自由人代表取締役)
馬奈木 俊介 (九州大学大学院教授)
【モデレーター】 川上 典李子 (デザインジャーナリスト)



デザイン都市の担い手を育てる



デザイン創造都市としての取組を地域に根づかせるには、子どもたちや若い世代が、デザインを身近なものとして学び、地域と関わる経験を重ねることが大切です。旭川では、小学生から高校生、大学生、社会人まで、それぞれの段階に応じて、地域と関わりながら学び、考え、実践する機会をつくってきました。

キッズデザイン事業では、小学生を対象に、身の回りのデザインから学ぶ冊子や動画を作成しました。「デザインって何だろう?」という問いを入口に、道具、建物、まちの表示、暮らしの工夫などを見つめ直し、発見する力や考える力を育てています。市内小学校では、教材を活用した出前授業も行い、子どもたちが地域や暮らしをデザインの視点で見えるきっかけをつくっています。

中高生には、地域課題をテーマにした実践型の学びを進めています。企業、大学、市民と連携しながら、調査、企画、発表、改善までを体験することで、教科で学んだ知識を社会で活かす力を育てます。あさひかわデザインウィークでは、高校生が「まちなかキャンパス」などに主体的に関わり、SDGsや地域の魅力を自分たちの言葉で伝える機会にもなっています。

また、地域のデザイン力を高めるためには、子どもや学生だけでなく、社会で実践する人材も必要です。旭川市では、地域のデザイナー、事業者、支援機関関係者等を対象に、デザインプロデュースを学ぶ実践的な研修を実施してきました。デザインを意匠だけでなく、事業全体を考え、課題発見、価値づくり、発信、伴走支援につなげる力として活用するためです。

デザインプロデューサー育成事業では、3年間で50名を育成し、現在約20名が地域で実際に活動しています。受講者の中には、起業や地域プロジェクトへの参画など、新たな動きを始めている人もいます。こうした人材が増えることは、企業支援、教育、地域活動、行政施策をつなぐ力となり、デザイン都市の活動を一過性の取組で終わらせないための基盤になります。

デザイン都市の担い手を育てることは、単に専門家を増やすことではありません。子どもたちが地域を見る目を持ち、若い世代が課題に関わり、社会人が実践を支える。その循環をつくることで、デザインは特別な人だけのものではなく、旭川の暮らしや産業をより良くする共通の力になっていきます。



UNESCO Subnetwork Meeting

サブネットワーク国際会議 in 旭川

2024年10月21日から5日間、旭川市でユネスコ創造都市ネットワーク・デザイン分野のサブネットワーク国際会議を開催しました。国内外のデザイン都市から21か国23都市48名が参加し、旭川の自然、文化、歴史、ものづくり、市民活動に触れながら、デザイン都市としての役割や課題について意見を交わしました。

会議のテーマは、「デザインの森 ― 次世代につなぐ幸せのデザイン」です。単に会議室で議論するだけではなく、旭川という地域そのものを体験してもらうことを重視しました。

プログラムは、旭川の文化と歴史、地元製造業、アイヌ文化、次世代との交流、家具デザイン、森や山との共生、日本文化探訪という7つの視点で構成しました。

特に大切にしたのは、旭川が目指す「自然と共にあるデザイン都市」の姿を、五感で感じてもらうことです。初日には、旭川市新庁舎に使われた木材を切り出した江丹別の山で、参加者がナラの苗木を植えました。成木になるまで100年近くかかる木を植える体験は、次の世代へ何を残すのかを考える象徴的な時間となりました。

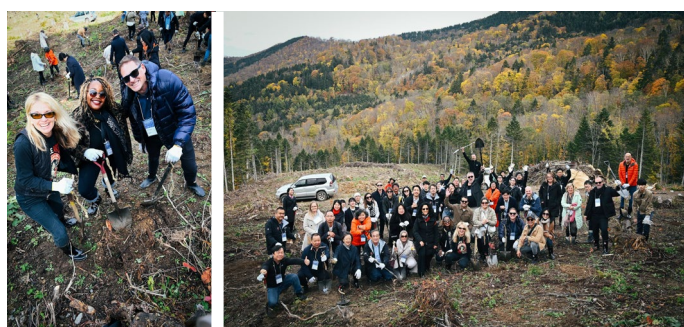
本会議では、各都市の取組や課題を共有し、デザインによる持続可能な都市づくりについて議論しました。

気候変動、地域産業の継承、教育、市民参加、社会課題への対応など、都市が抱える課題は国や文化が違っていても共通しています。期間中は、ビジネス、教育、ポリシー、ソーシャルデザインの4つの分科会に分かれ、デザインが都市の未来にどのように貢献できるかを話し合いました。

また、会議には高校生や大学生、市民も関わり、海外の参加者と直接交流する機会が生まれました。英語で地域の取組を紹介したり、文化体験を共にしたりする中で、若い世代にとっても、旭川が世界とつながる都市であることを実感する場となりました。

最終日には、旭川で作成した草案をもとに、「デザイン都市旭川宣言」が満場一致で承認されました。この宣言は、自然との共生を大切にしながら、デザインの力で持続可能で幸せな未来をつくるという、旭川から世界のデザイン都市へ向けたメッセージです。

この国際会議は、旭川を世界に紹介する場であると同時に、旭川自身が地域の価値を見つめ直す機会にもなりました。若い世代や市民が国際交流に関わり、世界の都市と課題を共有した経験は、今後のデザイン創造都市旭川の活動を支える大切な財産になりました。ここで生まれたつながりを、次の交流や地域での実践へと育てていくことが重要です。



あさひかわの体験と交流



今回の会議では、会議室での議論だけでなく、旭川の自然、文化、歴史、ものづくりを実際に体験してもらうことを重視しました。国内外の参加者に旭川を五感で知ってもらい、若い世代との交流を生み出すとともに、市民にもデザイン都市旭川の取組を身近に感じてもらうため、さまざまな関連プログラムを実施しました。

書道・茶道

市内12校から高校生77名が参加し、書道と茶道を通じて海外ゲストとの文化交流を行いました。毛筆体験では、参加者が列をつくるほど関心を集め、茶道体験では、生徒たちが静けさや所作の美しさを伝えました。海外参加者からは、書道の線の美しさや茶道の静寂が印象に残ったという声が寄せられました。

ミニまちなかキャンパス

ホテル会場では、高校生など総勢110名による「ミニまちなかキャンパス」を開催しました。あさひかわデザインウィークで生まれた若者主体の取組を再現し、15のブースで地域課題やSDGsを分かりやすく解説していました。展示内容や旭川の魅力について英語で説明する生徒の姿は、参加者から高く評価され、若い世代にとっても国際交流を実感する貴重な機会となりました。

上川神社での朝食

上川神社では、下國シェフ考案によるハラル対応の朝食を提供しました。食材の残渣活用をテーマにした料理は、旭川の食文化と持続可能性を伝える内容となり、参加者から好評を得ました。宮司による日本語や食文化の説明、巫女舞、お祓いの体験も、旭川での記憶に残る時間となりました。

市民交流会

会期中、市内では国内外のゲストと市民、経済人が交流する場を3回設けました。琴や尺八の演奏を通じて日本文化を体験してもらうとともに、地元関係者との意見交換も行われました。フェアウェルパーティでは、旭川チカップニアイヌ民族文化保存会によるアイヌ舞踊が披露され、参加者も輪に加わり、文化を共有する交流の場となりました。

併催行事

会期中には、藤本壮介氏とミケーレ・デ・ルッキ氏、石川俊祐氏と齋藤精一氏による公開トークセッションも開催され、世界から見た旭川の未来や可能性について語られました。また、旭川駅やまちなかでは、IFDA歴代金賞作品展や市民参加型のインスタレーションが行われ、市民が創造都市の活動に触れる機会となりました。

高校生、市民、企業、文化団体、料理人、クリエイターなど、多様な人が関わることで、旭川の地域資源を改めて見つめ直し、世界と共有する機会となりました。国際会議を通じて生まれた交流は、旭川の創造性を地域の内外に広げる大切な一歩です。

International Exchange

ユネスコ創造都市国際交流

ユネスコ創造都市ネットワークの一員として、旭川市は国内外の創造都市との交流を重ねています。国際交流の目的は、旭川を紹介することだけではありません。世界の都市が創造性をまちづくりに生かす取組を学び、外から旭川の強みや課題を見つめ直すことにあります。

2022年7月、ブラジル・サントス訪問

今津市長が、ブラジルで開催されたUCCN年次総会に参加し、旭川の取組を紹介しました。総会が海岸の清掃活動から始まったことは、創造都市の活動が環境や市民参加と深く結び付いていることを実感する機会となりました。参加者は限られていましたが、旭川が存在を印象付けることができました。

2024年6月、ポルトガル・ブラガ訪問

UCCN年次総会に参加しました。会議では「Bringing Youth to the Table for the Next Decade」をテーマに、次代を担う若者を都市づくりや文化政策の議論の場に迎える重要性が共有されました。また、文化を持続可能な発展の独立した目標として位置付ける「ブラガ・マニフェスト」が採択され、文化と創造性を都市の未来づくりの中核に据える姿勢が示されました。

2025年5月、フランス・サンティエヌヌ訪問

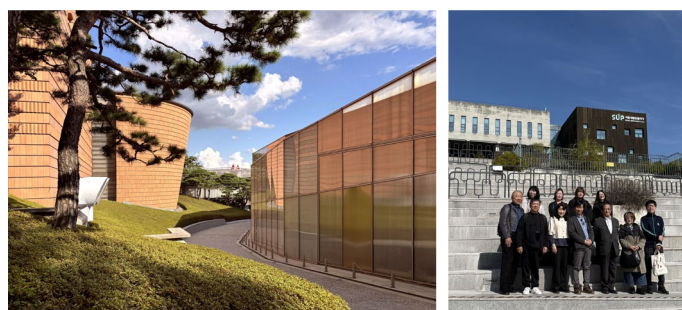
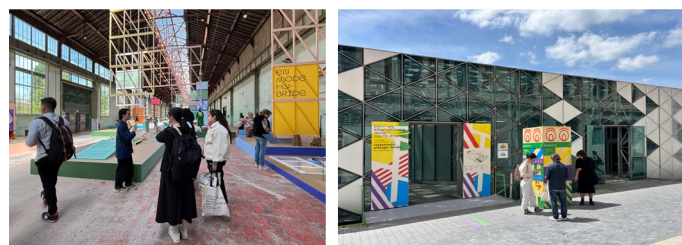
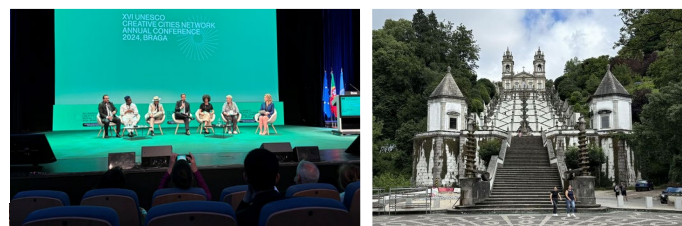
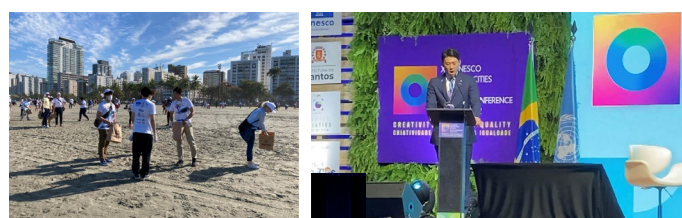
デザイン都市国際会議に参加しました。サンティエヌヌが武器工場をデザイン拠点へ転換し、産業の記憶を未来価値に変えた実践を見学しました。となりのフィルミニ市では、ル・コルビュジエの建築にも触れ、建築、デザインが地域の魅力を形づくることを学びました。

2025年10月、韓国・ソウル訪問

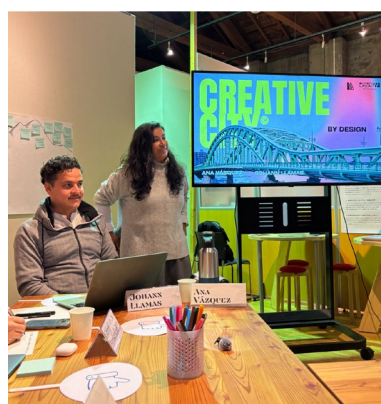
ソウルデザインウィークに合わせ、11名で訪問しました。ソウルは、デザインを都市政策や産業振興、教育と結び付けながら発展してきた都市です。デザインが国家戦略や都市ブランドの形成に位置付けられており、デザインを地域産業や人材育成にどう生かすかを考える上で、多くの示唆を得ました。

2025年11月、中国・武漢訪問

武漢ビエンナーレに参加しました。「文化的創造性と未来の都市」をテーマに議論が交わされました。その中で、森林や地域資源を生かし、人と自然の調和を図る旭川の都市づくりの実践を紹介しました。旭川らしいデザイン都市の方向性を国際的に発信する機会となりました。



国際交流プロジェクト



旭川市がユネスコデザイン創造都市に加盟した大きな意義は、世界の創造都市と直接つながり、対等に課題や知恵を共有できるようになったことです。

国や文化、気候、産業構造が異なる都市と交流することで、旭川の取組を発信するだけでなく、地域の課題を外から見つめ直し、新しい実践へつなげることができます。あさひかわ創造都市推進協議会では、このネットワークを活用し、国内外の創造都市と具体的なプロジェクトを進めています。

カタール・ドーハ市(デザイン都市)

20世紀を象徴するプラスチックは、暮らしの道具から都市インフラまで幅広く使われ、便利で豊かな社会を支えてきました。一方で、廃棄後の環境負荷や海洋汚染、生態系への影響は世界的な課題になっています。そこで旭川市とドーハ市は、「プラスチックに頼り過ぎない未来」をテーマに、若者を対象としたデザインコンペを実施しました。森に囲まれた旭川と、海に開かれたドーハ。異なる自然環境と文化を持つ2つの都市が、自然と人間の共生を考える機会となりました。

ブラジル・フォルタレザ市(デザイン都市)

ブラジルのユネスコデザイン都市であるフォルタレザ市とは、旭川デザインウィーク2023で交流ポスター展を実施しました。両都市のグラフィックデザイナーが、それぞれの地域性や文化、都市の魅力をポスターで表現し、デザインを通じて互いのまちを知る機会となりました。距離の離れた都市でも、視覚表現を通じて地域の価値を共有できることを示す取組です。

カナダ・ロンドン市(音楽都市)

ユネスコ音楽創造都市であるカナダ・ロンドン市とは、「City of Music Conference」の公式タイトルデザイン募集をきっかけに交流が進みました。旭川市在住の個人・団体を対象に公募を行い、4者から9作品の応募があり、上田カオル氏の作品が採用されました。2025年11月にはロンドン市を訪問し、現地関係者との交流や視察を通じて、創造都市の活動を支える中間支援施設の重要性を学びました。デザイン分野の旭川と音楽分野のロンドンがつながる具体的な交流です。

メキシコ・ケレタロ市(デザイン都市)

メキシコの研究者が、ユネスコデザイン創造都市旭川の取組を研究するため、2026年1月末から2か月間、旭川に滞在しました。旭川市立大学、企業、研究機関、クリエイターと意見交換を行い、地域におけるデザイン都市活動の実践についての調査を行いました。研究の焦点は、ユネスコ創造都市プログラムが持続可能な都市開発にどのような影響を与えるのかという点です。「デザイン都市旭川宣言」に関心を持ったことが滞在のきっかけとなり、報告会では、外部の視点から見た「ユネスコデザイン創造都市旭川」の活動に高い評価が示されました。

Design Cities Manifesto Asahikawa

デザイン都市旭川宣言

私たちは、地球温暖化をはじめとする容易には解決できない多くの課題に直面しています。これらは人類が豊かさを追求する過程で生み出したものであり、デザインもまたその一因としての責任があります。だからこそ、これらの解決にも、デザインが果たすべき役割があると考えています。これからのデザインに求められる最も重要な機能は、自然と社会の調和を促進することです。そのためには、まず自然を知ることから始めなければなりません。スピードや効率だけではなく、柔軟性や多様性を尊重する社会のデザインにおいて、自然は私たちに多くの示唆を与えてくれます。私たちは、デザインの力で持続可能で幸せな未来を築けると信じています。

1. デザインの目的は幸せを増やすことです。

私たちは、デザインが幸せを増やす利他的な行為であることを再確認します。デザインは時代と共に変化が求められます。ものが不足する社会にはその充足を、そして異常気象と人工知能が加速する現代には、従来とは全く異なる取り組みが必要になります。私たちは、デザインによる問題を発見し解決する機能を最大化して、誰にも幸せを届けられる世界の実現を目指します。

2. デザインの力で自然と社会の調和を図ります。

私たちは、社会的な存在である前に生態系の一部です。五感を覚醒して自然の言葉を真摯に受けとめ、多様な生態系と共存する道を見いだすことが重要です。私たちの活動の源泉は自然にあります。全ての都市は例外なく自然の恵みの上に成り立っているのです。したがって、私たちは、デザインの力を最大限に活用して自然と社会との望ましい調和を図ることに努力します。

3. デザインは社会的要素を結合する触媒になります。

私たちは、デザインの触媒としての機能で政治、行政、教育、文化、産業の有機的関係を強くします。デザインは社会的要素を結合することによって創造的な価値を生み出すことができます。デザインは多様な物事を関連付け、その本質を分かりやすく表現することができます。私たちは、そのつなげる力を活用して今までにない持続可能で幸せな社会をつくります。

4. 市民のデザインリテラシーを高めます。

私たちは、全ての市民のデザインリテラシーを高めることに力を注ぎます。それは同時に、デザイン都市に暮らす市民相互の結束を強めることでもあります。とりわけ未来を担う若い世代には、あらゆる教育の機会を通じてデザインに対する理解を深めてもらいます。同時に、デザイン都市の多様な文化などの学びを通して都市相互のネットワークを強化することに努めます。

5. 持続可能な未来への責任を果たします。

私たちはデザイン都市として未来への責任を持っています。それぞれの都市が抱える問題には、多様な解決策が求められます。また、長い時間をかけて育んできた独自の文化を継承することも重要です。私たちは、各デザイン都市の目標を理解しあい、ネットワークをより緊密にして、それぞれの都市の目標実現のための後押しをします。

ACPC

Asahikawa Creative City Promotion Council

あさひかわ創造都市推進協議会

2019年3月に設立。「まなぶ・つくる・つなぐ」をテーマに、市民、企業、教育機関、行政が関わり合うデザインの森を育てながら、旭川の幸せな未来をつくることを目指しています。

4

About the ACPC

あさひかわ創造都市推進協議会の理念と活動の経緯

あさひかわ創造都市推進協議会は、旭川市のユネスコ創造都市ネットワーク・デザイン分野への加盟を目指し、2019年3月に設立されました。同年6月に加盟申請を行い、10月に旭川市は国内3番目のユネスコデザイン創造都市として認定されました。

協議会は、産業界、教育機関、行政、金融機関、市民などが連携し、旭川のデザイン創造都市としての活動を進める推進組織です。デザインを通じて地域の資源を見つめ直し、人や活動をつなぎ、持続可能で幸せな社会をつくることを目的としています。協議会の理念は、「デザインの森をつくる」です。森が多様な木々や生き物によって育つように、旭川でも市民、企業、教育機関、行政、若い世代、国内外の創造都市が関わり合いながら、地域の未来を育てていくことを目指しています。

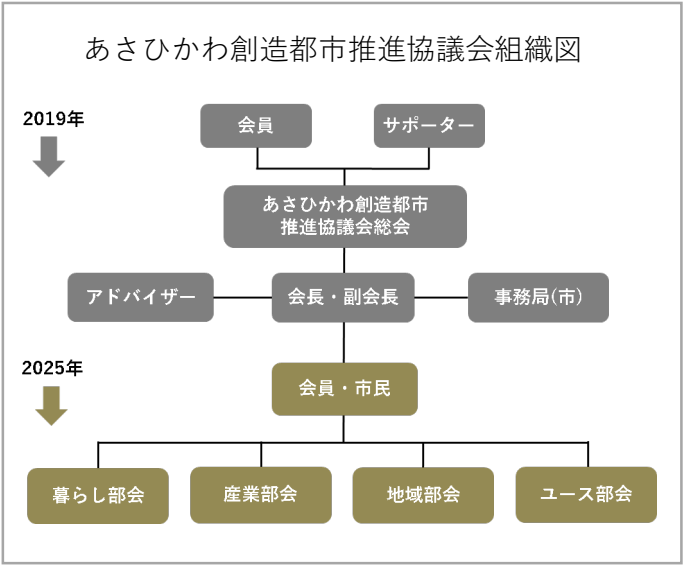
主な活動は、創造都市旭川の普及啓発、国内外交流、北の森と共に生きる創造都市の実現に向けた取組です。あさひかわデザインウィーク、市民参加型プロジェクト、次世代育成、国際交流、デザイン経営やデザイン思考の学びを通じて、活動の幅を広げてきました。

あさひかわ創造都市理念

デザインの森をつくる

MISSION 果たすべき使命

- 1.デザインを活かした創造都市旭川の普及啓発活動
- 2.ユネスコ創造都市ネットワークの一員としての活動
- 3.北の森と共に生きる創造都市の実現に向けた活動



定性的成果：意識の変化

ユネスコデザイン創造都市として、「まなぶ・つくる・つなぐ」をテーマに活動を進めています。若い世代が地域課題に触れ、考え、発信する機会を重ねることで、「自分たちの手でまちを変えられる」という実感が生まれ始めています。



定量的成果：着実な広がり

24名 デザインプロデューサー 活動者数	15校 市内高校・高等教育機関 連携数	27都市 国際連携都市数
約10万人 デザインイベント等参加者数 2025年度	105回 講習会等開催回数	約1万人 講習会等参加者数

創造都市推進協議会四部会活動

2019年に旭川市がユネスコデザイン創造都市となつて以降、あさひかわ創造都市推進協議会では、講演会やワークショップ、あさひかわデザインウィークなどを通じて、デザインの考え方を地域に広げてきました。活動開始から5年以上が経過し、これまでの学びや交流は、人のつながりや共通認識として蓄積されています。今後は、その知識やネットワークを生かし、具体的な地域課題に向き合う段階です。その実践の場として、4つの部会を設置し、デザインの力で旭川の暮らしや産業、地域の未来につながる取組を進めています。

暮らし部会	産業部会	地域部会	ユース部会
環境などの暮らしの課題解決に取り組む	企業のデザイン経営実装と付加価値創出	観光、食、中心市街地の地域資源の活用	次世代の視点による創造的プロジェクト



暮らし部会

暮らし部会では、市民生活に身近なプラスチックごみや資源循環をテーマに活動しています。「プラスチック＝悪」と単純に捉えるのではなく、使い方、回収の仕組み、ライフスタイル、製造側の事情などを含めて考えることを大切にしています。旭川市リサイクルセンターなどの現場を見学し、ごみがどのように分別・処理されているのかを学びながら、暮らしの中で無理なく行動を変えるための仕組みづくりを探っています。

産業部会

産業部会では、地域企業が自社の強みや課題を見つめ直し、事業の成長にデザインを生かすための取組を進めています。販路拡大、採用、商品開発、情報発信、組織づくりなど、企業が直面する身近な課題を入口に、デザインを経営改善や価値づくりの手段として共有します。今後は、地域企業の実践事例の紹介、デザイン人材や支援機関との連携を通じて、学びから実践につながる環境づくりを進めます。

地域部会

地域部会では、地域資源をデザインの視点で見つめ直し、地域の魅力として伝える活動を進めています。食、文化、スポーツ、観光をテーマに、普段は見過ごされがちな価値を掘り起こし、フィールドワークや市民へのヒアリングを通じて整理します。地域資源の背景や人の思い、暮らしとの関わりを捉え直し、共感されるストーリーとして表現することを大切にします。まちなかキャンパスなども活用し、市民や来場者の声を集めながら、次の事業や発信につなげていきます。

ユース部会

ユース部会では、若い世代が地域課題に関わり、考え、実践する機会をつくっています。特に「子どもの放課後1.5時間」をテーマに、高校生・大学生、市内企業、小学生が関わる共創プロジェクトを検討しています。高校生や大学生が企画・運営に関わり、小学生に学びや体験を届けることで、子どもたちの成長と、学生自身の地域理解・キャリア形成につなげます。若い世代が地域の担い手として経験を重ね、次の学びや行動へつなげていく部会です。

あとかき

あさひかわ創造都市推進協議会は、旭川市がユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野に加盟して以来、さまざまなプロジェクトを進めてきました。

理念は、「デザインの森をつくる」ことです。若い世代が地域課題に関わる取組、国内外の創造都市との交流、市民や企業が参加する事業を通じて、共に考え、共に学び、共に形にする活動を広げています。デザインは、共感を生み、立場や世代を越えた共創を支える力です。2024年に旭川で開催した国際会議では、旭川の自然、文化、ものづくり、次世代育成の取組を世界へ発信しました。最終日に承認された「デザイン都市旭川宣言」は、自然と共に生き、デザインで幸せな未来をつくるという旭川の姿勢を示しています。共感から共創へ。デザインで幸せな未来をつくるのが、私たちの活動の軸であり、デザイン創造都市旭川のアイデンティティです。



(1)入会と活動のご案内

あさひかわ創造都市推進協議会は、「デザインの森をつくる」を理念に、旭川の未来と一緒につくる仲間を募集しています。デザインは、特別な人だけのものではありません。暮らしの気づき、企業の挑戦、学生の学び、市民の参加がつながることで、旭川の新しい価値が生まれます。セミナー、ワークショップ、部会活動、ADW、国際交流などを通じて、共に学び、共感し、共創する場に参加しませんか。個人、事業者、団体など、どなたでも参加できます。

・入会フォームは
こちら



・あさひかわ創造都市
推進協議会の活動



(2)デザインの力を未来のカタチに

協議会の活動は、旭川市の「デザイン振興基金」を活用して実施しています。皆さまからのご寄付が、子どもたちや若い世代の学び、地域資源を生かすプロジェクト、旭川の魅力を国内外へ発信する活動につながります。継続的な取組のためには、デザイン振興基金へのご支援が必要です。個人のふるさと納税に加え、企業の皆さまには「企業版ふるさと納税」による応援もお願いいたします。

旭川の未来を、デザインの力で一緒に育ててください。

・旭川市ふるさと納税
特設サイト



・旭川市企業版
ふるさと納税サイト



(3)Instagramで最新情報をチェック

イベントやセミナー、部会活動、国際交流など、旭川で生まれている共創の動きを発信しています。ぜひフォローして、活動の“いま”をご覧ください。

・あさひかわ創造都市推進協議会公式Instagram
@design_asahikawa





あさひかわ創造都市推進協議会

Asahikawa Creative City Promotion Council

事務局／旭川市 経済部 産業振興課

〒078-8801 旭川市緑が丘東1条3丁目1番6号 旭川リサーチセンター2階

TEL : 0166-65-7047 Fax : 0166-65-7048

design.asahikawa@gmail.com

<https://design-asahikawa.jp>

発行日 2026年3月